
アリスと幻と

D－Dream

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アリスと幻と

【Nコード】

N6800E

【作者名】

D－Dream

【あらすじ】

幻獣ハンターのアリスが出会ったのは、ゲリラ活動中の5人。この5人こそアリスの運命を変える人たちだった。今は亡き、4体の神が居た祠や洞窟にあったパーツで創られた4体のロボット、青龍・白虎・朱雀・玄武とアリス操るメテオMK-IIで幻獣を守る大戦が今、始まる。

プロローグ

「アー!!どこ行きやがったあ!!」

オレは、Aクラス幻獣ハンターのアリス。オレなんて言っているけど、コレでも女。この時代では、龍、亜人など2〜3世紀ほど前まではいないとされていた幻獣が存在している。だが、どんなものがあるかなどは完全に解っているわけではない。その、未確認幻獣を調べるのが幻獣ハンターの役目だ。

だが、この仕事は公式ではない。いわゆる、闇職業だ。幻獣狩りは禁止されているとかで、見つかった者は即逮捕。ま、オレはそんなへまはしない。調べる時は、特注の電子図鑑を使う。コレを、幻獣の額にかざすことでいろいろな情報を読み取り図鑑に登録する。そして、そのデータを売る。そうして、オレは暮らしている。

そうそう、2〜3世紀前に無かった物といえば、ロボットだろう。なんていったっけ。そうそう、車。その車よりも使う人が増えている。オレは、そんな高価な物は使えないがな。

「ピチュ」

「!!そこか!!」

オレが駆け出したとき、地面が揺れた。ロボットの機動音がある。近くで、ゲリラ戦でもやっているのだろうか。そう思ったとき、近くにロボットが飛ばされてきた。

「うわっ!!」

『!!そのキミ!こんなところで何を。あっ!』

ロボットから声が響いた。そして、ロボットはオレの前に手を置いた。その手に銃の弾丸があたって跳ね返る音がする。

『ここは、危ない。早く逃げるんだ!』

そう声が聞こえたたん、別方向から矢が飛んできてロボットを貫いた。

『!! エンジンをつら……』

ロボットは、機動停止状態になった。オレなんかを庇わずによければ、機動停止にはならなかったはずだ。オレは、申し訳なさを感じた。そして、走り出した。近くにあった倉庫から光が漏れているのを見たからだ。もしかしたら、そのロボットの操縦者の仲間がいるのかもしれない。そう思い、倉庫の中に走りこんだ。

そこにあっただのは、1体のロボだった。だが、誰もいなかった。その時、あのオレを庇ってくれたパイロットは操縦席を貫かれて死んでいるかもしれない。そんな考えが横切った。

オレは、無意識にそのロボへと乗り込んだ。ラッキーなことに、キーは無いタイプでパイロット設定はしていないようだ。ロボの知識は、ある程度持っている。素早く、パイロット設定を終わらせる。が、ロボは起動しない。モニターだけがっている。モニターには、“ロボ設定を”とだけ表示されている。オレは、しばらく考えて気がついた。このロボには、幻獣の情報が必要なのだと。

オレは、図鑑をそこら辺にあったコードにつないだ。モニターにズラツといろいろな数字が並んだ。とりあえず、1番上のものをえらんだ。

キイイイイと音がして、ロボットが起動した。近くにあったヘルメットをかぶりガラスのような物をヘルメットの上から下ろした。このようなタイプはヘルメットについたモニターのような物に周りの画像などが表示される。ヘルメットをかぶったあとに1つのアナウンスがながれた。

“メテオMk-1Iキメラタイプ発進準備OK”

「いくぜええ!!」

プロローグ（後書き）

2作目です。かなりグダグダです。

e p 2 2人のレジスタンス

——あれ……ここは……ここはさっきの場所？　こんなにロボットの残骸があったわけ……

オレは1人、ロボットの中にいた。周りには誰もいない。ロボットの周りにも。

『ザザ……つと……がった……』

「!？」

目の前の周りの画像が小さくなり、誰かの映った画面が大きくなった。

『やっとながった。……フー……』

「あ……あの、す、すみません。勝手に乗っちゃったりして」
顔に機械油の跡がある。ロボットのメカニクだろうか？

『テンメエー!! オレのメテオがぶっ壊れたらどーすんだあ!？　まだ、調整中だったんだぞ!』

「すみません、すみません、すみません、すーみーまーせーん!!」

『エイド……　それぐらいにしておいて……』

ザッと、エイドと呼ばれた人の画面が小さくなりその横にもう1人誰かが映った。結構可愛い。

『割り込みゴメンねー。私、ナインって言うんだ。コイツは、エイド。ロボコンなんだよ。で、キミはなんていう名前?』

「アリスです。あの……　ロボコンって?」

『ああ、ゴメン。ロボットコンプレックスのことで、ロボットにメロメロってこと』

『オイ!!　誰がロボコンだ!?　誰が!?!』

画面内で2人がけんかする。

『それはおいといて。……アリス、キミ……　軍の人じゃないよね?』

オレは、うなずく。そして、図鑑からコードを抜いてモニターの

上のカメラに映るように持つ。

「オレは、幻獣ハンターだ」

『……初めは、情報を抜き取る時に幻獣を殺してしまう事がある。その屍が一般人のめにつくことがあるし、ハンターに追われた幻獣が一般人の目の前に現れることもある。」「幻獣の存在を一般人に知られてはいけない」そういう理由で、軍に嫌われている。だっけ？ ナイン？』

『ああ』

『じゃあ、仲間だね。アリス、僕の後ろについてきて』

e p 3 4人の仲間

操縦に不慣れなままエイドたちについて行き、行き着いたのはこのメテオと出合った倉庫だった。

「こんなところじゃ、軍に見つからんじゃ……」

『ちっちゃ……オレらの科学力を見くびるんじゃないよ。モニターの右下のボタンを押した後に、コード0068っていうのを押して。それで、ワープできるから。こういう、見つかりにくいところじゃないとワープん時捕まりやすいからね』

「そうなんだ……」

言われたとおりに、右下のボタンを押した後にコード0068を押す。押した瞬間、モニターがブラックアウトした。そして、再起動。周りに映っている風景は、さっきまでの倉庫ではなかった。いかにも、地下秘密基地的な感じの格納庫だった。左右に、4体のロボがいる。（いや、あるといった方がいいのか？）

そのうち、右側の2体から2人降りているように見える。とりあえず、コックピットハッチをあけて降りてみる。エイドとナイン以外に2人下で待っているようだ。

「ごころーさん」

「お帰り、エイド、ナイン。で、さっき言っていたアイリさん？」

「アリスです」

「ただいま。ツバサ、リリ。アリス、この2人はね今のゲリラ活動のメンバーなんだ。こっちがツバサでこっちがリリ。2人とも、そっちの朱雀と玄武のパイロットなんだ」

ツバサと呼ばれた男は少し強気な感じで、リリと呼ばれた女の人とはちょっと天然のおおらかな人と言った感じだ。そして、後ろにあるロボは真っ黒で装甲が硬そうなロボと紅色のツバサのあるロボだった。

「ちなみに、私が乗っていたのは白虎。スピード自慢のロボ。で、

エイドが乗っていたのは青龍。高い攻撃力が自慢かな」

e p 4 5人目の仲間

「皆、戦闘系の特徴があるのか。オレのメテオってのはどんな特徴が？」

「……？」

「分かんないか……」

後ろでカサカサと音がする。振り向くと、ツバサが何かを探してポケットをあさっていた。

「チッ、このタバコで最後か……」

「そこ、煙いからタバコ吸うな。吸うなら外で」

「外だったらばれるつつってケチつけたのはテメーだろ!!」

「だったら吸うな!!」

「何でだよ!!」

徐々にナインがツバサに大声と共に近づいていく。ため息が聞こえる。

「あーあ、まーた始まった。ナインとツバサのタバコ喧嘩」

「また？」

「ええ。よくありますの」

「あ、リリさん」

「リリでいいですね。あの2人は、ことあるごとに喧嘩するんですの」

会話をしながら、ケンカ中の2人を見ているとどんどんヒートアップしていきいろいろな物が宙を飛んでいる。

「あーあ。全くしょうがねえな……」

そういつて立ち上がった、エイドの顔面に思いつきりスパナがあった。

「その度に……」

「……。テメエラ……『いいー加減に……しろオー……!!』」

「……!!」（ナインとツバサ（とアリス）の声にならない悲鳴）」

「その度に、あんな風にエイドが止めるわけですよ」

あのエイドの怒った顔とそのエイドに殺されかけた仲間を見て、平然としているリリさんはいったい何者だろう。という、疑問が沸き起こった。

「また、このコンボかよ……」

「あ、ルフア」

「！！」

ひょこつと、真横に現れたのはアリスヴィジョンでは顔がキラキラ光って見えるルックスの長い髪の子（？）だった。

「……こいつは？」

「ア、アリスです」

「ふーん。オレは、ルフア。元は、メテオのパイロットだ」

「あ……」

スツと、しゃがんでルフアはオレの頭の上にポンと手を置いた。「Mk-1の時のオレの癖が残ってて操縦しにくかっただろ？」

「あ、アリスさん。ルフアは、先に言っておきますけど“男”ですからね」

「髪長いし、よく間違われるけど男だから」

（歯が……歯が白おーい！！）

にっこり笑うと、歯がキラッと光った。

「アリスさん、顔赤くなっていますけど。大丈夫ですか？」

「あ、あははは。大丈夫！！」

「この、物語内でラブコメ風な発展があると思ったら大間違いよ、アリス……（小声）」

「何か言ったか？ リリ？」

「いえ、何も」

にっこりと笑みを浮かべたリリの得意技は、本心を隠す笑顔だと知っている人はほとんどいない。

e p 4 5人目の仲間（後書き）

決して、ラブコメ風にはなりません。それだけは断言しておきます。
こんなだめ小説を読んでくださっている皆様ありがとうございました。
それでは。

e p 5 2回目のコックピット

「はぁ。さてと。あの喧嘩をとめねーとなっ」

ルファは、ケンカしている3人に向かって歩いていき、見事に3人^{ビンタ}に平手打ちをくらわせた。3人には、見事なぐらいにくつきり^{ビンタ}と手形がついている。特に、色白なエイドは真っ赤で目立つ。

「痛い……」

目に涙をためて、ナインが言う。

「もうちょっと、やさしく喧嘩を止められないのか？」

「文句言うなら、喧嘩すんな」

「だいたいなあ……」

ルファが説教を始めた矢先に、リリからりりらしくもない大声が飛んできた。「また幻獣が軍の機体に追われている」と。

すばやく、リリが幻獣の特徴をいう。

「高速で、空を飛んでいるみたいですわ」

「サンダーバード……？」

「え…… あの5人兄弟の？」

「ここでボケるなエイド」

ボケたエイドにルファから2発目のビンタが放たれた。

「俺とナインか。エイド、メテオは調整さえすれば出れそうか？」

「ああ」

「じゃあ、調整しといてくれ。アリス、あとから援護頼む」

それだけ、テキパキというと、すばやくコックピットに飛び乗りエンジンを起動させ出撃していった。

しばらくして、エイドから調整が終わったといわれた。

「アリス、画面の表示を名前に切り替えておいたから。頑張ってこいよ」

「おう！行ってくる」

そのやりとりだけして、エンジンを起動させた。確かに、この前の数字の羅列が名前に変わっている。

「おー。選びやすくなっている。えっと、たしかサンダーバードだったな」

画面をスクロールさせて、サンダーバードを選ぶ。ヘルメットをかぶると、アナウンスが流れた。

“メテオMk-IIIサンダーバードタイプ発進準備OK”

機体の外から、何かが羽ばたくような音がした。だが、気にする間もなく機体が急発進した。

e p 5 2回目のユックピット（後書き）

すいません。かなり遅れました。新年1発目が、3月手前になりました。これからは頑張ります。すみませんでした！！

e p 6 1つの悲鳴

急発進後、画面がブラックアウトした。再びモニターがついた時は、この前の倉庫だった。メテオの手で器用に、ドアを開けると真上で爆発音が聞こえ、バラバラと軍の機体の破片と思われる物が落ちてきた。

「うわぁ!!」

動揺している場合じゃない。これが現実だ。あの時に、ゲリラ戦に巻き込まれてから、戦うと決めてから覚悟していたはずだ。ポケットの中のペンダントを見て思い出す。

「確か珍獣ハンターって、ばれたら以外に罪重いなっけ？」

「マジで!？」

「でも、金になるぞ」

確かに、あの時既に命の危険は承知していた。ペンダントをポケットに入れ、戦線に加わる。

「行くぜ!!」

外に出て、地をける。ふわっと、機体が浮いた。何かが羽ばたく音がする。

『すっげー!! オートデータ処理システム開発した甲斐があったぜ!!』

「エ…… エイド？」

『オートデータ処理システム…… 略して、『ODC』だぁ!! アリス、お前の図鑑のデータを解析して、メテオに反映させるシステムさ! 白虎とか、玄武には固定データしかないからな。どんな幻獣のデータでも使えるようにしておかないとな、使い道が限られるだろ?』

「そ、そっか」

サンダーバードを選んだから、飛べるようになってるのか。納得しながら、敵機を撃墜していく。我ながら、器用だ。前に、紅い

翼のある機体が飛んでいるのが見える。

「ツバサ……?」

『メテ……オ……! アリス!? 調整が終わったのか。』

「ああ。幻獣は?」

『あの先だ。白虎が、追っている。』

「分かっ……」

『きゃああああああ!!』

悲鳴だ。もう1人の出撃パイロットは――――

「ナイン!!」

『ナイン。応答しろ! ナイン!!』

e p 6 1つの悲鳴（後書き）

アリス「うーん。また謎が増えたな」

ツバサ「謎？ ああ。あのペンダントとお前が話していた謎の人物のことか」

アリス「そうそう。ま、そのうち謎も解けるだろうけどな。さてと、微妙な告知的この後の物語予告も終わったし、恒例の（？）アレやりますか」

ア&ツ「こんなへぼ小説を読んでくださってる皆様、ありがとうございます」

作者「へぼ小説言うな」

アリス「いたの!？」

e p 7 1羽の幻鳥

『応答しろ！ナイン！！…… 応答がない……』

「オレ、見てくる！その間に……」

チラッと、後方用のモニターを見る。

「軍の追跡部隊の相手、たのんでもいいか？」

『……20体ぐらいか？ 上等だぜ！』

「サンキュ。行ってくる！！」

機体の速度を上げ、一直線にナインのところへ飛ぶ。

「待ってろ…… ナイン！！」

「さて、どいつからだ？」

方向転換し、機体から武器を取り出す。見た目はカッターのような短いナイフだ。まだ、ほかに武器を作ってもらってないからこれしかないが、無いよりはましだろう。敵機は、無言で銃や遠距離武器を構えた。

「そうか、A Iか。まあ、いい。兵士が乗っているよりは、楽だ」

「ナイン！！」

ナインの機体『白虎』が、何かを守るように四肢を広げていた。機体に突き刺さった漆黒の矢から、オイルが滴り落ちている。時折、矢が刺さった部分から、電気がもれている。そしてその後ろには、5メートルはあるだろうか。翼が雷でできているような驚が羽ばたいていた。

「ナイン！だいじょうぶか！？」

叫んだ瞬間に、サンダーバードはびくつとし、消えた。身を乗り出した瞬間に、外部スピーカーが入ったようだ。オレの声におどろ

いてきえたようだ。だが、よく見ると嘴と蹴爪だけが残っている。
ワキンヤンの特性ももっていたのだろうか。

『アリス？ よかった。援護に来てくれたんだね。こっちは、外部
カメラを破壊されたみたい。アリ……………気……………け……………。敵は……………
…』

いきなり、通信状態が悪くなり、通信が途切れた。

踏み込み、勢いよく敵機にナイフを突き刺していく。AIのある
頭部か、エンジン部だけを狙って正確に攻撃を繰り返していく。か
れこれ、10体ほど破壊できた。だが、こっちもそれ相応のダメー
ジを受けた。残りが破壊できるかが、わからなくなった。

「できるだけ、早く決着をつけたいなあ」

コックピットの中においておいたタバコに火をつける。

「タバコを買いに行きたいんでね」

ep8 2人の敵

——アイツが来る

「誰っ!?!」

聞き覚えは無いが、どこか懐かしさを感じる暖かいような声だった。が、その声と重なるように、氷のように冷たく槍のように鋭い殺気を感じた。メテオの後ろに、黒い機体が立っていた。

『……ワキンヤンを渡せ。さもなくば、汝らを破壊する!!』

やばい。絶対にやばい。そう直感的に感じた。

「お前は何者だ? ただの軍人ではないな!?!」

『ラビ王子の近衛兵だ。さて、交渉の返事は?』

「……NOだ!!」

ラビ…… ラビリア…… この国の第一王子だ。昔は、やさしい子だったのに……。

『NOですか。では、あなたたちの機体を破壊させていただきましよう!』

すごい速度で、黒い機体が飛んでくる。避けるには、時間が足りないだろう。

「武器は……。くそっ! どこにあるかわからない……!」

「残りのAIは…… 10機。増兵が無けりゃ、10分で」

近くにいた1機のAIを破壊し、宣言した。

「片付ける!」

——右上にあるパネルを

まただ。あの、なぞの声。確かにこの声のとおり、モニターの左右には映像に支障が無いように薄くすけたパネルが3つずつ並んで

いる。

——なぞれ

ほかに方法があるわけではない。この声に従って、右上のパネルをなぞった。

「あと、3機」

2機のA Iとエンジンを同時に破壊した。残りは1機だ。

「次で……!!」

振り返ると、目の前に最後の1機がいた。

『A Iのなかにも、本物は混じっているんだよ。そろそろ、手柄が欲しいなあ。下級兵に戻りたくはないしね、ケケッ』

e p 9 2つのこえ

「間に合ってくれ……!!」

“撃墜用必殺技システム起動”

“データ読み込完了済み”

次々とアナウンスが流れる。だが、その間にも敵は近づいてくる。

“攻撃スタンバイ完了済み”

“攻撃準備完了。発動できます”

最後のアナウンスとともに、発動ボタンを押す。

“サンダーストーム発動!!”

「くっ」

さすがに、カッターじゃきつい。

「ケケ、さすがにきついっしょ？ ま、おかげでこっちは下級兵に落ちないですむけどね」

「お前…… その機体は近衛兵だろ？ 近衛兵は幻獣討伐に出るほど、暇なのか？」

「ケ、うるせ。ま、いいけど。すぐに…… 消えてもらうからな！ ケケッ！」

キィイイと、起動音がしたと思うと敵機は熱を持ち、赤くなった。「オーバーヒート用の機体なわけ。さあ、溶かしてあげるぜい!？」

敵機は、ブースターで迫ってくる。

（せめて、対抗できる技があれば……!）

——汝、力を欲するか？

（何だ？この声は…… 直接…… 脳に直接響いてくる……）

——……勝手にやらせてもらうぞ

「は？」

“フェニックスモード発動”

最後にそう響いたかと思うと、機体が今まで無いぐらいにすばやく動いた。

何が起こったか解らなかった。唯一解るのは、敵はさっきの必殺技ですごいダメージを受けたということだ。火花が散る中、敵はつぶやいた。

「驚いた。まさか、5人目がいたなんてな……」
すこし息を整えると敵は、

「今は、見逃そう。次は無いと思え」
そう言い残し、去っていった。

「守……れた……？」

——最強の近衛兵にのみ与えられる機体『ジョーカー』に乗った敵。また、戦うことになりそうだが

それから先、オレの記憶は…… 無い。

ep10 5人目の意味

「……ス ……リス ……アリス！」

「ん……ここは」

「良かった。ありがとう。アリスのおかげで助かった。あの幻獣も住処に戻せたよ」

目がまだぼやけていて、表情までははっきりとわからないがナインのようだ。

「まさか、近衛兵まで出てくるとは……。お前も災難だったな、ナイン」

「何いってんの。そういうあんただって、ここついた瞬間ハッチ開けて『後は頼む』とか言ってるぶっ倒れたくせに」

「う……、うるさいっ！ 大体お前だって」
ガチャッと扉の開く音で、話は途切れた。

「あ、何やってんだ？ お前ら、またけんかか？ ……まあ、いいか。ツバサ、朱雀に故障は見当たらなかったぞ」

「ああ、そうか」

ツバサは驚きと安堵の表情を同時にうかべた。

「ん？ 何かあったのか？」

「いや、別に。多分、俺の気のせ」

「声だとき。朱雀が、勝手に技を発動させたとか」

間髪いれずに、エイドが訳を説明した。

「声か……。オレも、聞いたけど」

「！ ま、まま、マジで？ お前も？」

「う、うん。技を発動させる方法を教えてくれたけど」

何だったんだろう、あれは。声になる前に、喉でその言葉は消えていった。

「5人目……」

「ん？」

「あ、いや。なんでもない……」

思わず声に出してしまった。あの、黒い奴。最強の近衛兵に言われた、5人目とはいったい何を指した言葉だったのだろうか。レジスタンスの5人目という意味だったのだろうか。

「……」

「どうした？ アリス？」

「いや、オレもレジスタンスなんだよな、って思ってたさ？」

「だよなあ。オレも実感なかったもん、最初^{はじめ}は」

ツバサはうなずきながら言い、ポケットから出したタバコの箱のビニールをはがし始めた。

e p 1 0 5人目の意味（後書き）

途中で書き方が変わった気がします。ええ、かなり。こんな書き方だっけって思いましたから。

ep1 1つの記憶

本当に変わった。まだ、そんなに時間はたっていないのに。

隣で、カチツカチツとライターをつけようとする音が聞こえる。

「ツバサ、ここは禁煙だぞ？ 吸うなら出てけ」

「悪^{わり}っ。じゃ、オレは外行^{わり}ってくる」

ドアが閉まると同時に、エイドがナインに向かって言った。

「珍しく、静かに言ったな？ 何回目だ？」

「いいでしょ、何回目だって。さすがに、怪我したときにまで煙いのはごめんだ。それに……」

表情が曇る。なんだか、思い出したくなさそうな“出来事”を思い出したような顔だ。

「ナイン……？」

ナインは軽くほほ笑むと、

「なんでもない。それより、アリス……」

ナインは話題を変えようとしているようだ。

「本当に、私たちの仲間として戦う覚悟はある？ ……まあ、今更って気もするんだけど」

「何？ 今更、その質問。もちろん、オレは戦うよ」

命に危険があったって構わない。幻獣ハンターを始めた頃に、覚悟はあった。それに――。

「……？ アリス、どうした？」

「な、なんでもない！」

いきなり黙り込んでしまったオレを心配してエイドが声をかけた。

――そうだよ。時間^{とき}は流れている。もう、何年も会っていないな。アイツに……。

沈黙がつかったのか、エイドが口を開いた。

「あゝ。アリス、体、大丈夫か？ お前は、目立った傷とかそういうの無かったけど？」

「特に痛いところはないよ」

「そうか。だったら良かった」

ガチャッと扉が勢いよく開いた。パタパタと、小走りにリリが部屋に転がり込んできた。

「大変、大変、大ニュースですよ！！」

e p l 1 1つの記憶（後書き）

皆さん、あけましておめでとうございまーす!!

……もう、3月だって？

……すいません。なかなか、続きが思い浮かばなくて……。

でも、今はだいじょうぶです!!

これからはバンバン更新していきますよー!!（気持ちだけでも）

それでは。

e p 1 2 1人の訪問者

「大変？ 何が？」

くるくると丸まった薄目の茶髪をゆらしながら、リリが口を開く。

「今、キティ様が……！！！」

「え！？ キティって…… 隣国の」

「そう！！」

リリが身を乗り出す。

「あの隣国の王女様の“キティⅡシルバーローズ”様が！！！」

そこで息が切れたのか深呼吸をして、その後に大きく息を吸ったリリは扉の向こうを指さし、

「今、この基地に来てるんですの！！」

と、興奮気味な声で言った。その後、あまりのことに一瞬みんなの時間が止まった。

そして、一番最初にみんなの口から出た言葉はもちろん――

「ドオウエエエー？」

――奇声でできた悲鳴のような叫びだった。

アリスが起きた頃。場所は、城の中の一室。近衛兵だけが入れるエリアにある部屋。

その扉を、黒のパイロットスーツを着た男がくぐった。

「よう？ 一匹、仕留め損ねたんだって？ ケケ、お前らしくねえなあ？」

男は何も言わず、ただ声をかけてきた男を一瞥してさっさと奥にある自室へと行ってしまった。

声をかけた男はやれやれといった感じで肩をすくめた。そして、懲りずにずっと部屋の片隅にいた女に声をかける。

「アイツ、冷たいよなあ？ ルイ？」

「今のは、あなたが悪い。あの人は、ナルキッソスの生まれ変わりだって言ってたのはあなたでしょ、ヒート？」

ルイと呼ばれた女は、パターンと読んでいた本を閉じ静かに言った。右目の目じりの下に青いハートのタトゥーがある。その青いハートが、もともと少し悲しそうなきれいな青い目をさらに悲しそうに見せている。ルイはその青い目を外に向けて誰かの名前をつぶやいた。

e p l 3 1組の“キョウダイ”

メッシュ（3色ぐらい）が入ったショートヘア。髪型以外ルファに瓜二つの顔。

「え…… ルファ？ 髪…… 切った？ てか、イメチェン……？」
その人はちよつと驚いたような顔を見ると、にっこりと笑いかけた。

「ああ、貴方たちがルファがお世話になっているっていうアリスさんたちね？ 初めまして。キティⅡシルバローズです」

明るく女性的な声だ。キティはにっこりと笑ったまま、軽く礼をしてきた。あわてて、返事をする。

それにしても…… 王族らしい動きや言動とは裏腹に、キャミソールで隠れて見えるか見えないかぐらいのショートパンツなど格好はぜんぜん王族らしくない。

「あの……。キティ様」

「ああ、いいの。今日はプライベートだし、敬語とかやめてキティって呼んで。なんか、そういうの慣れないから。ね？」

にっこりと笑う。そして、「やめなかったら、国家権力を使ってまでやめさせるわよ？ フフフ……」とつぶやいている。そのつぶやきに呼び寄せられたかのように扉が開く。

「買出しから帰ったぞ。……って姉貴！？ 何でここに？」

「あら、お帰り。ルファ？ 苦労したわよ、探すの」

うふつと笑ったキティと、何がなんだかわからず混乱しているルファ。瓜二つな為、髪型で見分けるしかない。髪型をそろえると、見分けることができそうにない。

「えっと？ 姉弟？」

「そ。双子なのよ、私とルファは。さて、悪いけど……。2人にしてくれる？ ちよつと、話したいことがあるから」

「じゃあ、オレの部屋で」

そう言うと、ルファとキティは部屋に向かって歩き出した。

ep14 4人の戸惑い

「で、話って？」

「えっと」

どちらにすればいいか、迷っているような仕草。それをみたルフアは、いつもより一段と低い声で返した。いつもは高めの、少年声と呼ばれても良いような声で話していた。本来の地声はかなり低い。「誰も聞いてないし、いいよ。どっちでも」

「じゃあ——ルルウリア」

キティは急にまじめな顔で、ルフア——ルルウリアを見つめた。

「王女として、あなたに忠告をしに来ました。——これ以上、他国の問題に首を突っ込むのは止めなさい。あなたの命に関わります。王位継承者としての自覚を持ちなさい」

「！」

「それにしても……」

ルフア以外のメンバー全員で、戸惑っている。あまりに急すぎる展開に、だ。

「双子かぁ。って、ことはアイツも“王子”ってことだよなぁ？」

ツバサのつぶやきに、エイドがビクツと体を縮めた。

「どうした？」

「いや……。ルフアって、ここでの扱い……」

ナインの問いに、エイドが恐る恐る口を開いた。そして、思い出してみる。

ルフアの仕事。掃除、パシリ、買出し、パシリ、洗濯、パシリ、

料理……etc。エトセトラ

「ほぼ……」

雑用！！（というよりパシリ）

その一言に、冷や汗が止まらなくなる。

「王子なのに。……やばくね、オレら？」

「うん。まあ、やばいよね？ 私たち……っていうか、命が」

最後の一言で、その場にいた全員が凍りついた。

「……それって、どういう」

「あゝあ。疲れたあ。それよりさ、この国のおいしい料理とか食べさせてよ？ ね？」

話をすりかえようとするキティに、言い放つ。

「それは、ここの王子に頼まれたことか？ それとも——」
言いかけたが、やめた。

——よそう。この話は。

そう思い、そのままベットに座り込んだ。キティは、そんなルフアをチラッと見ると静かに部屋を後にした。

e p l 4 4人の戸惑い（後書き）

そろそろ変えようかなあと、思いまして。

ども、『黒龍焰』改め『D－Dream』です。

“みてみん”にも、登録したので挿絵も入れてきますよ？

まあ、絵はへたくそですけどね。“好き”と“得意”は違いますから（言い訳）。

それでは。

e p 15 1つの思い

「すみませんでした!!」

ルファが部屋を出てくると、待ち構えてたようにみんなが謝った。

「な、何だよ!？」

「いや……いろいろと。……ほら、雑用とか雑用とか雑y」

「何だそれ？」

「え？」

ルファは「雑用雑用」と繰り返していたナインに笑いながら言葉を返した。

「だって、オレ自分からやってんだし」

「そ、そうだったの？」

「ああ。で、そろそろ食事の準備しないと食べなくなるんだけど？」
ルファは時計を見た。

「あ、姉貴は？ 帰った？」

「呼んだ？」

ひょっこりとキティが顔を出した。

「今日は帰ってくれ」

「えー、何でー？ ルファの料理食べたいし」

「あのなあ」

トサツと近くにある机に、買って来た食料を袋ごと置いて、中身を見せる。

「姉貴の分まで、買ってねえの!!」

「……はあい。じゃあ、帰るわよ。じゃあね」

そういって、キティは帰った。ルファはため息をついて、台所へ
といってしまった。

「ルファって、王子だったんだ……」

“アリスの部屋”と木の板がドアノブにぶら下がっている部屋に

向かいながら、つぶやく。木の札は、戦っている間にルフアが作ってくれたそうだ。扉を開けると置かれているのはまだベットだけという、とても寂しい部屋だった。

ベットに腰掛けると、昨日今日のことが思い出された。あまりに、急な展開だった気がする。

「……明日、荷物とってこよう……」

寂しい自分の部屋を見て、つぶやいた。そして、その日はそのまま眠ってしまった。

——御休み、アリス

そんな声が聞こえた気がしたが、誰の声だったか考える前に深い眠りへと落ちていった。

e p 1 5 1つの思い（後書き）

更新せずに幾月が経っただろうか。というあたりですみません。つて、2日目じゃん！？物語の中！つてことに気づきました。部活がいそがしく、絵ばっかり描いていました。……このめんどくさがりメエ！つてな感じです。2年も続けながら何やってんの……。これからがんばります……。今以上に。それでは。

e p 1 6 1人の少女

「おはよう」

本を読んでいたナインに声をかける。

「おはよ、どっかでかけるの？」

アリスの格好を見たナインは、そう聞いた。

「うん。ちょっと、荷物を取りに」

「そっか。手伝おうか？ 一人じゃ大変でしょ？」

本を閉じて、ナインが立ち上がる。

「ありがとう」

「いいよ。ちょっと外の空気吸いたところだったし。じゃ、行こっか」

普通に扉から出たところは思ったよりも目的地に近かった。ちょっと急ぎ足で、10分。

「ここだよ」

そういつて指差したのは、極力目立たないようにかかれた看板。

「『獣研究所』？ ここにいたの？」

「うん。おおっぴらに、幻獣とか書けないし。ちょっと名前があれだけだね」

扉を開けると、前まで毎日見ていた後景。窓の位置、家具の位置。そして、

「ただいま、リョイ」

見慣れた後姿に声をかける。

「お帰り、アリス」

聞きなれた声で返された“オカエリ”。長い三つ編みがゆれる。彼女はあどけない笑顔を見せた。彼女は後ろにいたナインに気づき、立ち上がった。

「はじめまして。リョイといいます」

「はじめまして、ナインです」

ナインの声を聞き、リヨイは軽く驚いたようだった。ほぼ気づかれないような程度だった。

「どうしました？」

「い、いえ。よろしくおねがいします。で、アリス。もしかして……」

リヨイはアリスのほうに向きなした。

「うん。ここから出て行くよ」

言われる前に、自分から切り出した。リヨイは悲しそうな顔をした。

「そう……。さびしくなるよ、ここも」

「たまには顔出すし、大丈夫だって。じゃあ、荷物もってくね。ナイン、こっちに来て」

アリスはナインを連れて、使っていた部屋へ小走りで去っていった。

（アリス……。まさか、あの“白い疾風”をつれてくるなんて……。戦いたくはないよ、アリス）

そう思ったリヨイに通信が入る。「幻獣と抵抗軍^{レジスタンス}が現れた。至急、城に集合」と。

e p 17 1人の近衛兵

ジジジ……。

「通信だ……」

ナインに通信が入った。どうやらエイドからのようだ。

「分かった。でも、できれば荷物の移動はさせてほしい。幸いワーポイントに近かったし、すぐに合流するから。………ありがとう」

「何かあったの？」

「幻獣が出た。たぶん、近衛兵にも気づかれているって」

「分かった。でも、荷物少ないから大丈夫。すぐに合流できる」

そういつて、ナインが通信に応じている間に準備を済ませた箱を見せた。ダンボール2箱分。ほとんどが本と機械のパーツだ。

「行こう。近衛兵よりも先に幻獣を助けないと」

それなりに重いダンボールは運ぶのに時間がかかった。大体、20分ぐらいはかかったように思える。部屋には運び込まずに、壁際に置いたままロボットに乗り込む。……はずだったが――

「――無い……。メテオが……。無い」

「え？」

修理中と布をかけられていた朱雀と応急処置された白虎を除いて、ロボットは残っていない。モニター室のほうに向かう。朱雀が残っているということは、ツバサも残っているということだ。

「ツバサ！ メテオは！？」

「おお！？ びくったあ。メテオなら……」

そういつてモニターを指差す。モニターにはメテオの機体が映っている。パイロットは――

『ルファ、アリスのお帰りだぜ。交代の時間だ』

ツバサが通信でメテオのパイロットに呼びかけた。

『分かった。……って言いたいけど、無理そうだ。ごめん』

機体から見える景色が映っているモニターには、深緑の近衛兵の機体が映っている。

『こいつを倒して、帰還する。絶対に』

「見たこと無い機体……。青いのと黒いのは、元からいた人たち。白いのはいない。戦うことになるのは、アリス……。かな」

見たことの無かった機体が、リョイの前で戦闘体制に入る。

「ごめん。アリス。嘘……。嫌いだったよね……。」

そういいながらも、弓を引き絞る。

「でも、戦わなくちゃいけないの。それが、軍に生まれた宿命だから」

涙とともに弓を放った。

e p 18 1人の期待と覚悟

横移動で目の前の矢を避ける。それでも、精確に絶え間なく矢は飛んでくる。ここまで精確に連続となると敵ながら尊敬できる。

「やっぱいな……」

少しずつだが矢が刺さり、動きも鈍くなり始めた。あまり高威力でなかったのは幸いだ。近づかなければ反撃できないが、避けるのに精一杯で動けない。

「……いつそのこと前に進むか……？」

ただ、敵の腕前を考えると得策ではない。それに機体メテオがバージョアップしてからは乗っていないし、どんな能力があるのか分かっていない。武器がどこにあるのかも含めて。

「しかも、何のデータか分からないし……」

とりあえず、前回のデータが残っていたからそれで起動はできた。だが何のデータか分からない限り、有効な戦術を使えないだろう。

「どうする……」

しかし、返事が無い。無いと分かっていたけれど、期待していた。その期待は見事に裏切られた。

「オレにはもう興味ないってか……。いいさ、“運命の人”がオレじゃないと分かり切っていたことだしな。受け付けてくれただけ、まだマシか……」

——汝、覚悟はあるか

聞こえた。ハッキリと。求めていた、声が。

そして、思いだした。この声が前回言っていたことを。

『汝、戻らない覚悟が必要となる時。長き戦いに深く身を投じることになる』

「覚悟は……あ……」

——どうした？ 有るのであろう？ 無いなら無いで、さっさと答えるがいい

有る、とは答えるのが怖く、言えなかった。

（『深く身を投じる』か……）

「ごめん……。みんな……。メテオ！」

——む？

「オレの覚悟を受け取れ！」

e p 19 2つの通信

(何か策でもあるのかな?)

急に動きを止めたメテオに対し、リョイも機体の動きを止めていた。次の一撃で決める。そう思ってた。

(コックピットを外して……。無理かな。メインコンピあたまューターを狙えば、アリスを傷付けないで済むかな)

弓を引き絞り、力を溜める。矢が光り始めた頃に、メテオにも動きがあった。メテオの周りに、放電された電気が渦巻いている。

「何をするかは知らないけど、コレで終わらせる!」

照準を合わせようとしたところで、放電された電気が規則的に動いていることに気づいた。

『避ける! リョイ!』

通信で聞こえてきたのは、ジョーカーの声。

「お兄ちゃ……!」

メテオから放たれたサンダーストームが、リョイの目の前に飛び込んできたジョーカーが乗っている一般兵用の機体に直撃した。兄を救おうと、照準をあわせてないまま矢を放った。ジョーカーをサブコックピットに乗せて、メテオを見た。

「あ……」

照準を合わせてなかった矢は、メテオを貫いていた。それも、コックピットがあると思われるところを。

「ああ……!」

——汝の覚悟は、そんなものか!?

……うるさい。頭に響く……。

——帰るのであろう、彼らの元へ

……そうだ、オレは——

「倒して帰ると、誓った!」

刺さった矢を引き抜き、敵に投げ返す。が、避けられた。

「ま、当たるとも思っていないしな。……絶対に、倒す。倒して、みんなの元へ」

放電量を上げる。通信でエイドに伝える。

「修理できなかったら、ごめん」と。

ep20 1つの違いと力

「最大放電。……もって、3分か……。なんか、ロボアニメみてえだな」

息を整え、意識を集中する。さっきまで聞こえていた無理な放電による機械音が消え、さっきまで見えていた景色も消えた。

暗闇の中にあるのは、意識しているメテオと深緑の機体だけが浮かんでいる。メテオだけが動いている錯覚に陥るほど、速度の差がある。

ファイナルエレクトリックストーム

「『最終の電磁嵐』……いくぞ」

「見えない！？　どこから来るか！？」

「落ち着け、リョイ。……右に避ける！」

兄の声に従い、機体を右に動かす。一般兵用のロボの残骸の影から、メテオの攻撃が飛んできた。

「次は、左斜め後ろに下がれ！！」

さっきまでいたところの地面が黒くこげている。前を見ると、次々と雷が飛んできている。後ろに下がっていくが、距離が徐々に縮まる。

「は……っ……」

「リョイ、落ち着け！　あせるんじゃないぞ！」

「分かって、いるよっ！！　……っ！」

返事に気をとられて、当たってしまった。装甲の色が1部落ちるだけですんだが、次は当たり所が悪ければシステムに異変が起きるかもしれない。だが、射程範囲内に入ってしまったように避けるにも避けない。

「……お兄ちゃん、ごめん……」

「リョイ……まさか……！」

近衛兵用の機体と一般兵用の機体の違いは、その性能差のほかに

特殊能力があること。ただ、非常事態などに備えて敵に情報を与えないようにしていただけ。そして、今はリョイにとって非常事態。回線を使って仲間に回す。その間にロックを解除し、システムの起動をする。

「ごめんなさい。特殊能力のロック、解除しました」

e p 2 1 1つの大技

機体が甲高い悲鳴を上げている。無理をすることになるため、そんなに時間が無い。

「いくよ……」

地面に勢いよく手をつく。そこから、地面が盛り上がり鋭くとなる。

「拘束！ 対象は敵機3体！」

地面が触手のようにうねり、敵3機にまきつく。敵の動きを封じる。

「抑えてる間に、あの電気をまとっている機体以外を破壊して！ あれは、その内電力が尽きると思うから」

『了解しました』

『了解です』

一般兵が青い機体と黒い機体のメインコンピューターを破壊する。拘束から逃れようとする力がなくなったことを確認して拘束を解き、残りの1機に力を集中する。懸命に拘束を断ち切ろうと攻撃を仕掛けてくるが、雷は地面に吸収され効果は無い。

「リリ、エイド！ ……ダメか。とっくに、時間切れてるしな……」

——電力はもう残ってないぞ。大技を使わなかったから、倍近く時間がもったものの……

「“大技”？ あるのか？」

——ああ。だが、今の電力では撃てるか撃てないかの瀬戸際だ。「可能性は、0ってわけじゃないんだろ？ だったらやるしかないだろ。教えてくれ。どうしたら、撃てる？」

——……分かった。こちらで、準備をしよう。それまで動かすでないぞ

「ああ」

キイイイト、甲高い音が頭に響く。

「動きが無い……。電力が尽きて動けなくなったのかな」

そう思い、拘束を解いたときだった。

マキンママエレクティックストーム
『最大の電磁嵐！！』

轟音とともに雷の嵐に包まれた。機器が狂い、連絡も取るに取れない。その状況で嵐がやむのとほぼ同時ぐらいに、機体はその動きを止めた。

ep21 1つの大技（後書き）

投稿したと思ってたらできてなかった……orz。何年やってんだよ、自分。
って、感じでした。すいません。

e p22 1つの暴走

『戦いは終わった……。帰るって言いたいけど、全員動けねえや。迎えにつて、……。聞いてるか?』

その声は、誰もいない部屋にこだましていた。

『どうする!? あたし独りじゃ、無理よ!』

「お願い、オレとツバサであいつを抑えておくから!」

『……。分かった。絶対抑えててよね!』

ナインのスピード自慢の白虎が敵の横を通り抜け、幻獣の元へと急ぐ。それを追いかけようとする敵に、朱雀の装備である銃の弾がいくつか当たる。

『お前の敵はオレ等だ。来いよ』

青い機体と、黄色い機体が向かってくる。だが、

「ツバサ、オレ、武器持ってねえんだけど……」

『……。マジ? 入ってんだろ? 両足の外側に……。え』

どう見ても、メテオの両足には繋ぎ目らしいものが見当たらない。

『マジか。しょうがねえ。オレの使え』

「ありがと」

朱雀の足からナイフを取り出したその勢いで、相手に傷を付ける。両方が武器をもったのを見てか、敵も後ろに下がり武器を構えた。スピードをモチーフにした槍と、4つのハートからなる投擲武器^{とうてき}と思われる武器だ。

(攻撃範囲的に不利だ。どうしょ?)

——ならば、有利になればいいではないか

声が聞こえたと同時にナイフが光に包まれた。光はそのまま伸び、剣を形作った。デザイン性なんて無い機械的な剣だ。そこまで見届けると、意識はフェードアウトしていくようにゆっくりと消えていった。

『アリス!? 止めろ! アリス!!!』

意識が戻ったとき、朱雀に抑えられていて、構えていた剣は敵機のコックピットがあるであろうという場所に当たっている状態だった。見るも無残なまでに、機体は壊れていた。剣はカシャンと見た目より軽い音をたて、地面に横たわった。剣を形作ったときのように、光が再び刃を包んだ。

「オレ……は……?」

アリスの意識とシンクロするように、剣を包んでいた光はゆっくりと消えて元のナイフが現れた。

e p 2 2 1つの暴走（後書き）

ご無沙汰です。生きてました。とある事からの疲れと思われるものにより、執筆がかなり遅れました。また、j u k e nとかいうものがあるようなので、しばらくの間休載させていただきます。必ず戻ってきますので、それまでお待ち下さい。ま、ひょっこりと顔を出す可能性ある……わけないか。行きたいところにいけそうにも無いので、そろそろ勉強に励むといたします。それでは。

e p 23 1人の消失

アリスが戦いに乗っていったのは、メテオMk－I。いつもアリスが使っているメテオの前身機だ。メインコンピューターはMk－IIに引き継がれて搭載されていなかったが、アリスがもっていた部品で代用することができた。少し性能が落ちるものの操作方法は同じで、操作することはたやすかった。

だがメテオと1度会話をしたアリスは、自分の中に違和感を感じていた。

「大丈夫か、アリス？」

ツバサが声をかけてくる。

暴走したアリスを間近でみていたツバサは戸惑っているのと同時に、少し恐れを感じていた。容赦なく切り刻むというより叩き壊すに近い感覚で、攻撃をしていくアリスは別人のように怖かった。

「平気だ」

返ってきた声を聞いて、ツバサは安心した。攻撃中のアリスの声はなんだか低く、アリスらしくなかったからだ。

「ただいま。元のところに返してきた。……なにか……あったの？」
戻ってきたナインがその空気に疑問を投げかけた。

「なんでもないよ。大丈夫」

いつもどおりの声と表情でナインに返す。アリスは、このことを無いことにしたいらしかった。

「そ？　なら、いいんだけど。みんなは帰ってきてないの？」

「あ、ああ。まだだな。動けないのかもしれないな。迎えに行くか？」

「そうだね。えっと、ちょうど的人数だよね。ツバサはリリー、アリスはルフアを迎えに行つて。エイドは私が行くから」

リリーの玄武は1番重い。ツバサの乗っている朱雀は周辺の重力

の軽減ができるらしい。朱雀を使えば早く帰ってこれるだろう。

青龍は1番遠くにあるようで、移動速度が1番早い白虎で迎えに行くことになった。アリスはルファだ。

機体を走らせる。メテオは1番近い地点にいるはずなので、そろそろ見えてくる頃だ。

「あ。いた！」

通信のスイッチを入れ、コックピット内の映像が映ったときだった。

「え……」

メテオのコックピットの形体上、画面に映らないことはできない。だが、画面にルファの姿がない。

「ルファが……消えた……？」

e p 2 3 1人の消失（後書き）

大地震があり、大変な状況なのですが、元より受験終わりのこの日曜に更新する予定があったので、本日更新させて頂きます。

追記）それと、小説の手直しで追加した設定を書き加えておきます。ルファはいつもは少年声と呼んで良いような感じの高めの声で話している。

本来の地声はかなり低い。

です。 e p 1 4 に追加した部分です。

e p 2 4 2人の戸惑い

『アリス、あとはルフアだけだよ』

ナインの通信が耳をかすめる。頭まで届かない。ただ呆然と、目の前の景色を見ていた。

メテオは構造上、かなり遠くから見てもコックピットハッチが開いているか分かるし、中に乗り込んでいないとハッチは閉めることができない。だが、目の前のメテオはハッチが閉まっているにもかかわらず肝心のルフアがいないのだ。もちろん、必要最低限の広さであるコックピットに隠れる場所なんてない。

返事のないアリスにナインが声をかけた。

『なにか、あったの？』

「……ルフアが……いない……。ハッチは閉まっているのに……画面に映ってない……」

震える声を何とかして抑えた力ない声だった。ナインはアリスの声を聞き、顔を曇らせた。

『……画面が壊れてるだけかもしれないし、メテオと一緒に帰ってきて。……ううん。画面が壊れてるんだよ。ハッチ閉まってるんだもん、絶対そうだって。大丈夫！』

ナインはできるだけ明るい声をつくって、そう返した。アリスもそう信じたかったが、画面はしっかり表示されているし、メテオ内部の機械音も通信音に混じっている。その状況が“壊れてはいない”ことを示していた。

「わかった。今から帰る」

それだけ返し、こちらから通信をきった。

「通信が壊れてるだけ。だから、ルフアは中にいる。絶対に！」

自分に言い聞かせるように言葉を発した。

教えてもらったとおりにワープの準備をし、ワープを始める。自分の言葉を信じながら、自機とメテオのワープが終わるのをまつ。

「絶対帰るっていったもん…… 大丈夫……」

e p25 1つの新システム

「やっぱ、いない」

コックピットを開けたエイドも現実味がないようだった。

「ありえない。どうやって脱出したんだ？」

「エイド、考えるのも分かるが先に直しておかないと、やつらが来ても対処できないぞ」

「あ。ああ」

ツバサにいわれ、エイドは早速修理へと急いだ。ツバサも含め、他のみんなは落ち着かない様子で何かをしようと探している。何かが見つかる人は少なく、うろうろと歩き回ったり、立ったり座ったりを繰り返すなどが多かった。

「そだ、アリス。ちよつといいか？」

準備をしていたエイドが思い出したような声をあげ、アリスを呼んだ。

「実はさ、メテオ用の新しい操縦システム開発してたんだけどさ。元のシステムのダメージが大きいんだ。この際、新しいシステムにしてもいいか？」

「新しいシステム？ どんな感じのなんだ？」

「直感的に戦える感じのシステム……ってとこかな？」

直感的に操作って、どっかのゲームかよ。と突っ込みたいところだが、それを可能にしたエイドの技術力はすごいものだといえる。未だ、そんなシステムが開発されたなんて聞いたことがない。

「元のシステムの復旧って、かなりかかりそう？」

エイドは少し考えると口を開いた。

「結構かかりそうかな。新しいほうの使えば、結構時間短縮できそうなんだけど」

「じゃあ、新しいシステム使おうよ。あと、よかったら手伝おうかな？ 少しは整備の知識あるし」

「本当？ 助かるよ。正直、1人じゃきつかったんだ。いつつもルフアに手伝ってもらってたし」

エイドはうれしそうな笑顔を浮かべた。そして職人の顔に戻ると、直すのに必要な箇所のピックアップと道具の準備を始めた。

e p 26 4柱の神と祠

「いっつも、こんな大変なことしてたんだ」

もう疲れて動けないといった様子で、アリスはそう口にした。

「確かに大変だけど、やっとなないと戦えないしね。ほい、コーヒー」

「ありがとう」

もらった缶コーヒーを開けずにもったまま、整備中に気になったことを口にした。

「ねえ。なんで、機体ごとにコックピットの形状が違うの？」

そうなのだ。近いものもあったが、それぞれがまったく言っていないほどに中身が違っていた。操縦桿だけでなく、モニターや各スィッチの位置など同じ人物が1人で設計したとは思えないほどの大きく違っている。

その問いにエイドは、あきれるほど簡単な答えを返してきた。

「だって、オレが作ったわけじゃないし」

彼は少し苦笑いをしつつ、さらりと言ったのけた。しかし、このレジスタンスにはメカニックスはエイドぐらいしかないはずなのだが。

思考が上手くついてこれていないアリスを見てなのか、コーヒーを1口飲むと説明を始めた。

「どっから言えればいいか……。この国の中央と四方に祠ほこりがあるのを知ってるよな？」

確かこの国の神話にでてくるとかいう、4柱の神の住まう祠というのがあった気はする。中央の祠の話は聞いたことがないが。

「四方の祠は知ってる。けど、中央にも祠があるって聞いたことないよ。それとどう関係あるの？」

「んー、そうか。ま、あるんだよ。オレも詳しく知らないからあれだけどさ。で、その祠にこいつらのパーツが在ったんだよ」

エイドはそういうと親指で、後ろにあるメテオたちを指差した。
「オレはそれを組み立てただけ。誰がつくったなんて知らないし、
関係ない」

エイドはニヤリと笑みを浮かべた。

e p27 3人の出撃

「そ、それって盗んだってこと!？」

「まあ、そうなるね。どっちにしろ、レジスタンスやってりゃ捕まるしね。同じことだよ」

エイドは笑いつつ言っているが、なかなかすごいことを言っているように思う。

その時、「幻獣が出た」とアナウンスが流れた。「いつもタイミングよく流れるような気がする」と思いつつ、アリスは機械たちを見上げた。

「修理したばかりなのにもう出撃かあ……」

よく見ると、細かい傷等が目立つ。が、なぜかリリの乗る玄武だけ傷がない。見えないわけではなく、本当に傷がないのだ。

「アリス! 出撃するよ!」

声をかけられ、考える間もなくメテオへと乗り込む。

乗り込み、起動準備を完了させる。今回はキメラだ。そう、最初に乗ったときと同じ状態だ。ただひとつ違うのは、操作システムが直感的なものに変わったことだ。ヘルメットもない。

「え……と、ログイン!」

エイドに教えてもらったとおり、音声認識で起動する。ディスプレイ類はないが、視界が変わり、同じ高さに青龍や玄武が見える。

「すごい……」

手を握ったり等、細かい動きが容易にできる。それだけ確認すると、軽くジャンプするような感覚で出撃した。

『どうだ、アリス? 感覚的には』

エイドからの通信だ。本当に話しかけられているような感じで聞こえる。

「……うん。すごくいいよ。なんか、メテオになったみたいなのが

する」

笑い混じりで、そう返した。

見回すと、エイドのほかにリリもいるようだった。黒い機体が光を受けて輝いている。

ただ、幻獣は見当たらない。同じく、親衛隊たちも見当たらない。

『どこにいるんでしょう？ この辺りにいるはずなのですが……』

リリの透き通るような細かい声とかぶるかのように、“何か”の叫び声のようなものが響き渡った。

e p 28 1体の伝説

『アリス！ 今のどこからか……』

「あっち！ えっと、東の方向から」

悲鳴が聞こえてきたほうを指差しつつ、答えた。

『行こう！！』

急行すると、黒色の親衛隊の機体が何かを羽交い絞めにしている。暴れまわるそれは、誰でも1度は聞いたことのある生物だった。

「うそ…… ドラゴンって実在したんだ……」

赤色に染まったウロコ。時々口から漏れる炎。それはどう見ても、あの伝説上の生物だった。

『こんなところにいたなんて……』

リリの言葉をさえぎるように、エイドの何かに気づいたような言葉が聞こえた。

『ここって…… 東の祠の近くじゃないか！！』

探してみると、たしかに親衛隊の機体の向こうに何かの祠らしい跡が見える。装飾は親衛隊とドラゴンの激闘を物語っていたが。

ふと視界の隅に緑色の光が映った気がした。

「なんだ…… あれ？」

よく見ようと目を戻しても、それを見ることはできなかった。見えたのは、ボロボロになった祠の装飾だけだ。

『アリス？ なんかあった？』

「いや、見間違えたみたい……。ごめん。それよりも」

『ああ…… 助けないとな。ドラゴンなんて希少種』

そういつて、エイドは親衛隊のほうを見た。押さえ込まれたドラゴンが炎を吐き、よりいっそう暴れまわる。

助けようにも、こちらにも危なそうな暴れ方だ。うかつに近寄れない。

『どういたしましょう？　このままでは……』

『ああ。助けられないよな……。でも、行くしかないだろ！』
エイドの乗る青龍が親衛隊のほうへと動き始めた。

e p29 1つの変貌

『やめろおおおお!!』

叫びつつ、エイドは敵のもとへと歩を進める。その後を追うように、リリとアリスも急行する。

そして近づいたことにより、ドラゴンが血を流していることに気がついた。

『血が……。許せませんわ!』

リリも憤慨している。そうだろう。ドラゴンの鱗は硬く、傷つきにくい。なのにウロコを貫き、流血するほどの攻撃をしたということなのだから。

『絶対に許せねえ!』

「待って! エイド、そのままじゃドラゴンにあた……」

エイドはアリスの制止も聞かず、敵に殴りかかる。いや、殴りかろうとした。が、何者かに止められたかのようにエイドの青龍は静止した。

『なっ!?!』

―我、血族を見つたり

「な……。何あれ……」

青龍が光に包まれている。そして、みんなの脳裏に響いた声。何かが起ころうとしているのは、一目瞭然だった。

『エイド! 応答しなさい、エイド!!』

通信機からはリリの声は響くものの、本人からの返信はない。

『応答……。しなさいよ……』

しばらくしてリリの声が弱弱しくなり始めたとき、その光も弱まっていった。そして青龍の姿が目視できるようになり、みんなが異変に気づいた。

青龍の色が変わっていた。綺麗な青から、どこか毒々しく感じる緑へと。見覚えのある緑だと思い、ハタと気づいた——ここに来たときに一瞬だけ見えた光の色だと。

『……何のまねですか……？』

男の声が響いた。前にアリスが戦った近衛兵の声だ。「分からない」と答えようとしたやさき、男の声が響いた。

『オレも知るかよ……。だがな、声が聞こえたんだ！ 仲間を見殺しにできねえって言う、青龍こいつのな！』

e p 3 0 2つの憤怒

『そいつを放せ！ ……悪いけど、こいつがどう動くかはオレにも予測がつかねえんだ』

変わった駆動音があたりに響いている。ひどく重い、うなるような低音。まるで、青龍の怒りを代弁しているかのような駆動音だった。

『こいつの怒りが爆発する前に、放したほうがいいと思うぜ？』

『……ふむ』

エイドの警告を受け入れたのか、親衛隊はドラゴンを放した。

『これでいいですか？』

ドラゴンが去っていくのを見届け、親衛隊がこちらに向きを変えた。

『これで全力で戦っていただけですか？ ……進化を遂げた、あなたの機体には興味がありますね』

親衛隊機がファイティングポーズよろしく、機体の重心を低く構えた。

『戦い、その機体を奪えば、こちらでも進化できる機械を作れるかもしれないからね』

丁寧な敬語の裏に、親衛隊の興奮が伝わってくる。

金属音が響き、敵機のパーツが地面へと落ちた。プロテクターを外したままのポーズで指先を動かし、「かかってこい」を言わんばかりの挑発をしてきた。

『すみません。興味があるものができると、饒舌になっちゃうみたいで。……お先にどうぞ』

「エイド、どうする？ ……エイド？」

アリスは、聞こえてきた挑戦に対するエイドの回答を聞いた。

……が返事はなく、答える代わりに青龍は敵機の前へと進み出た。

『我、挑戦受けたり。汝ら肅清す』

スピーカーから聞こえた返答は、エイドの声ではなかった。――脳裏に響いた声のようだった。……いや、やはり声色が変わったエイドの声だ。

『エイド……ですわよね？』

リリの震える声の質問に返ってきたのは、こんな返答だった。

『否。我、汝ら曰く“東方の守護神”なり。名を――』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6800e/>

アリスと幻と

2011年11月27日16時52分発行